変わる日本の「暮らし」と「まち」 22

地元の人と産業を守る一助に

岩手・大槌町大ケ口地区復興公営住宅

（2013年◆平成25年建設）

新田匡央
にった・まさお
illustration：Shigeyuki Sakata

作家の井上ひさし氏と児童文学作家の山元護久氏との共作「ひょっこりひょうたん島」は、1964年から69年までの5年間、NHKで放送された伝説の人形劇である。当時の子どもたちから絶大な人気を呼んだこの人形劇の舞台となった島は、岩手県沿岸部の大槌湾に浮かぶ蓬莱島がモデルだと言われている。

◆木材は地場産を使ってほしい

3月11日の津波は、その蓬莱島を飲み込み、海沿いのわずかな平地に密集した木造住宅を根こそぎ持っていった。UR大槌復興支援事務所の渡邊正彦は、初めて大槌に入ったときの印象をこう語る。

「残っていたのは家の基礎の部分だけでした。ほかの被災地では家の形が残っているところも少なくないのに、まちそのものが消えてしまったように何もない。何から手をつけていけばいいのか、想像もできませんでした」

津波は海から300メートル離れた町役場も襲った。地震で損壊した建物内が危険だったため、役場前に建てたテントで防災会議を行っているときだった。列席していた町長以下の幹部数十人が呑み込まれ、役場の機能は一瞬にして失われた。大槌の復興へのスタートが遅れたのは、そうした事情がある。渡邊が大槌に入ったのは、そうした混乱のさなかだった。

8月、新しい町長が就任し、そこから復興事業が加速する。復興公営住宅の建設もスピードが重視された。仮設住宅で辛い思いをしている住民に、1日も早く住まいを提供する使命があるからだ。そのためには、まず建設用地の確保である。

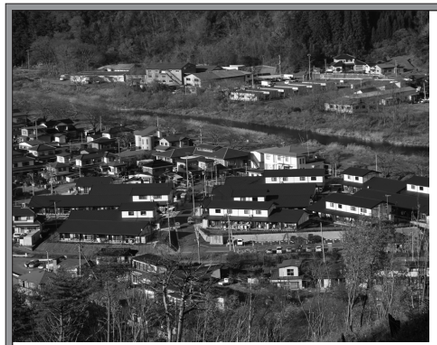
海岸から3キロ地点に古い町営住宅がある。揺れがおさまったところへ、津波が押し寄せた。

「家の半分以上が水に浸かり、泥まみれになりました。まさかここまで来るとは思いませんでした」

当時の住民はそう語る。復旧は困難と考えられ、立地と広さからここが復興公営住宅用地に決まった。用地取得のための地権者との交渉がないことが、迅速な用地確保につながった。

そして、町は木造とすることを決定した。木造建築を採用した理由がいくつかある。それは周囲との調和を目指したことだ。大槌には鉄筋コンクリート造の堅牢な建物はほとんどなく、木造建築の住宅が大半だった。調和の取れたまち並みにするには、復興公営住宅も木造建築が望ましかった。

地場産業の再建と雇用の問題も大きい。大槌は町の90パーセントが山林だ。その資源を生かし、大槌や釜石などでは林業が産業の柱の一つとなっていた。地区の木材を一手に引き受けていたのが、釜石に事務所を置く釜石地方森林組合だった。だが、津波で事務所が流され、17人の職員のうち組合長ら5人が犠牲になった。貴重な資料やデータもすべて流出した。



周囲と調和がとれている木造の大ケ口地区復興公営住宅

「存続は不可能だと思っていました。でも、残った12人が一緒に再建しようと言ってくれたんです」

涙ながらにそう語るのは、森林組合で総務課長を務める高橋幸男さんだ。高橋さんは、被災を免れた木材を仮設住宅向けに販売することから始めた。さらに、住宅の再建に地元産の木材を使ってほしいと各市町村に訴え続けた。

大阪府堺市から大槌町へ応援に来ている大槌町復興局用地建築課長の西迫三千男氏はこう振り返る。

「山の木を加工して建設資材にすることで、地元企業が潤う。雇用創出と人口減少を食い止めるために、URさんには地元企業の活用と地場産材が使える方策を検討してほしいとお願いしました」

◆「つながり」と「みまもり」

要請を受けた渡邊は唸った。

「URでは、まちの防災という観点から、これまで不燃建築物の供給が主となっています。かつて木造住宅を供給した時期もありますが、当時を知る人は退職し、ノウハウ不足です。設計担当者をはじめ、私も勉強し直しました」

震災から2年半後の13年8月、大ケ口復興公営住宅が完成した。建物は木造の長屋風。白い壁と木の茶色が印象的である。12棟ある建物は、平屋建てと二階建てが混在する。その中に、1DKから4DKまでの部屋が70戸、不規則に並ぶ。

西迫氏の言葉通り、町の人口は震災前から22パーセント減り、高齢化率は3割を超える。復興公営住宅の建設に際し、高齢者のみまもり体制づくりと地域コミュニティの醸成は最重要課題だった。大ケ口復興公営住宅では、その課題を解決するための配慮が、数多く施されている。

異なる間取りを不規則に配置した設計は、高齢者の独居世帯が集まることなく、あらゆる世代の住人の交流を促すためだ。敷地内のコミュニティ広場の一つには井戸を設置し、周囲にベンチを置いた。まさに「井戸端会議」が行われる環境を整えることでも、高齢者のみまもりを強化することができる。

それだけではない。通路に面した各住居のテラスには「ぬれ縁」が設置され、隣の家との境はあえて隙間が空けられている。入居者からは「誰が住んでいるかわかるので安心」という声があがる。隣や周囲の住民のコミュニケーションもとりやすい。老夫婦の家のテラスに隣家の高齢者が来て、ぬれ縁でみかんを食べながら談笑する姿が見られたのはその象徴だろう。

津波で住まいを失った79歳の女性は、2年間の仮設住宅暮らしを経て、9月に入居したという。

「4畳半しかない仮設住宅は、狭いうえに隣の人の声が聞こえて、息が詰まって苦しかったわ。でもここに入ることができて、やっと呼吸ができるようになったのよ」

渡邊は「住みやすい」、「いい所に住めてよかった」という住民の声が嬉しいと語る。高橋さんの勤める森林組合は、復興公営住宅向けの木材販売をベースに、経営を再建させた。職員も、震災前より多い19人に増員した。

すべての大槌町民に共通する思いは、大槌に人と仕事が戻り、まちが元気になることである。大ケ口復興公営住宅の建設は、そのモデルとなりそうだ。

街に、ルネッサンス
UR
UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社